

## KCELS

Newsletter No.24  
MARCH 2009

### 第33回神戸女学院大学英文学会(KCELS)大会報告

英文学科長 溝口 薫

英文学科卒業生、院生の研究発表の場として設置された神戸女学院大学英文学会(KCELS)大会も今年で33回目である。本年も、11月最終週の金曜日、午後2時からL-28 教室にて、特別講演と院生による研究発表という構成で開催された。学会準備担当は英語学研究セクションである。

特別講演には、神戸大学大学院人文研究科教授の窪園晴夫先生をお迎えすることができた。窪園先生は言語学のなかでも音声学、音韻論を専門とされ、日本語と他の言語の言語現象比較を通して音韻構造の普遍性と個別性の解明を精力的に進めておられる研究者である。今大会では『日本語の多様性と異文化間コミュニケーション』というテーマのもと、大変楽しいご講演をいただいた。

ご講演では、日本語方言の多様さ、その差異に潜む意外なことばの法則や不思議な言語現象について伺った。窪園先生の巧みな話術のお陰であるう、聴衆一同、諸例の一つ一つに、驚き、笑い(ほぼ5分に1回は大笑い)、感心し、子供のように無心になってお話に聴き入った。私たちの母語の豊かさ、方言の微妙さ、その不思議を実感してこそ、ことばを大切にしたいという思いも育つ。窪園先生は「ことばの力、異文化コミュニケーション力をつけたいなら、まず方言を楽しむことから」とユーモラスに締めくくられたが、ご講演の一時間半は、そのことを深く実感することができた貴重なひと時となった。

研究発表では、本学科大学院博士課程の川口裕子さんが、日本語の並立助詞「や」について、また同課程の大喜多香枝さんが、アメリカ児童文学作家キャサリン・パターソンに関する研究発表を行った。ともに益々の活躍が期待される爽やかな発表であった。

### 日本語の多様性と異文化間コミュニケーション

神戸大学大学院  
人文学研究科教授 窪園 晴夫

「異文化間コミュニケーション」と言えば、日本語と英語のような異なる言語(文化)間において問題にされることが多いが、実は日本(語)の内部においても、言語や文化の多様性によって同様の問題が生じている。この講演では、日本(語)内部における言葉の差異 方言間の差異や世代間の差異 によって生じるコミュニケーション障害の問題を、語義(意味)、発音、語法からの実例をもとに具体的に解説する。



日本語の特徴の一つが方言の多様性であり、方言間には実にさまざまな違いが存在する。たとえば「リンゴを食べる」の「を」を何と呼ぶか調べてみると、「つなぎの「お」、「むずかしい方の「お」、「を(wo)」等々、地域によってさまざまな呼び方がある。また同じ語であっても、地域によって意味が異なることも多い。たとえば「ねまる」という語は、「座る」(富山他)「正座する」(北海道、東北他)から「肩や腰がこる」(奈良)「食べ物が腐る」(南九州)まで多様な意味を持つ。「肉」のように方言差が小さいように見えて、「牛肉」、「牛肉+豚肉」、「牛肉+豚肉+鶏肉」と、地域によって意味範囲が異なる語も珍しくない。日常生活において問題を引き起こすのは、むしろこのような微妙な違いを持つ語である。

語法・用法の地域差を表す一例が、「行く」と「来る」の意味範囲の違いである。関東や関西では相手を訪問するときに「行く」を用いるが、南九州のように「来る」を用いる地域も珍しくない(後者は英

語と同じである)。「持っていく」と「持ってくる」にも同様の違いが生じる。

私の家にいつ来る?

(関東、関西) 明日行く。(鹿児島) 明日来る。

私の家にいつ持ってくる?

(関東、関西) 明日持っていく。

(鹿児島) 明日持ってくる。

語法では、「...しよる、しよった」という表現も方言差を示す。大阪で「こけよった」と言えば、「実際にこけた」ことを意味するが、神戸以西のいわゆる播州弁では「こけよった」は「実際にはこけなかった」ことを含意する。

発音の地域差で問題を引き起こす可能性があるのが、アクセントとイントネーションである。「雨」と「飴」のように地域によって発音が異なるのが日本語の特徴であるが、このようなアクセントの違いは文脈の助けもあって、それほど大きな問題は引き起こさない。これに比べ、アクセントがイントネーションと絡んだ場合に、問題が生じることが多い。たとえば、「わかる」という動詞を平叙文、疑問文で発音すると、東京と大阪の間に次のような違いが生じる。

東京：わかる、わかる?々

大阪：わかる、わかる?々

両方言とも疑問文では文末を上昇調で発音しているが、単語の発音(アクセント)が異なるために、文全体の発音が異なってくる。関西で「わかる?々」という標準語の発音を聞くと、関西の人は侮蔑された印象を受けるといふ。

疑問文のイントネーションは他の地域でもコミュニケーション障害を引き起こす。「疑問文は文末を高く上昇調で発音する」というのが教科書に書いてある記述であるが、疑問を下降調で発音する地域も少なくない。たとえば名古屋では「誰、何、どこ」などの疑問詞を下降調で発音する(だれ<sub>↓</sub>、なに<sub>↓</sub>、どこ<sub>↓</sub>)。他の地域の人がこの発音を聞くと、何か責められているような印象を受けることが多い。鹿児島のように、下降調が疑問文イントネーションの基本である地域も少なくない。たとえば「わかる」という文を疑問文にしたければ、「わかる<sub>↓</sub>」と文末を下降調で発音しなくてははいけない。他の地域から鹿児島に移り住んだ人は、(文脈の助けが少しはあるものの)地元の人がいつ質問しているのかわからないという問題に直面する。

地域差(方言差)とならんでコミュニケーションの問題を引き起こすのが、言葉の世代差である。特に、いわゆる「若者言葉」は若年層と中年層との間に少なからぬ誤解を生み出す。短縮語であれば「ポルノ」「ペット」

「まくる」などの例がある。同じ語であっても、若者と中年層以上とでは意味が異なる。「やばい」や「パンツ」という語も同様である。嬉しいときに発する「やばいなあ」という言葉や、「今日はパンツはいてくればよかった」などという文は、若者言葉に疎い人には意味不明となるが、大きな誤解を生む可能性が高い。語法の世界でも、「全然大丈夫」「全然OK」というような「全然」の使い方、「五千円からお預かりします」のようなコンビニ言葉にも中年以上の人は違和感を覚える。

このような若者言葉の多くは、日本語の乱れとして批判されがちであるが、言語学的にみると、単なる言葉の変化を表しているとも言える。本講演では、これまで日本語や英語で起こった言語変化と比較しながら、言語変化という側面からも若者言葉を考察してみたい。

## 発表要旨

### 並立助詞「や」の意味について

川口 裕子

神戸女学院大学大学院博士後期課程

本研究の目的は、日本語の並立助詞「や」の意味について考察することである。辞書の定義や先行研究では、並立助詞「や」は、ある集合の具体例を列挙するのに用いられる助詞であり、そこに挙げられていない他の要素も存在する('and the like')という意味を持っている。すべての要素が列挙されている('and')という意味を持つ「と」とははっきり区別されるべきである、とする見方が主流である。しかし、実際には「と」と「や」の使い分けがあいまいな例や、すべての要素を列挙するのに「や」が用いられる例も見受けられる。また、発表者は、「や」には2つの物を並べてその中の1つを選ぶ('or')という意味も含まれていると考えてきたが、そのような記述のある先行研究は極めて少ない。

発表者は、並立助詞「や」の意味について考察するために、「や」は文脈によって 'and'・'and the like'・'or' などに解釈されるとの仮説を立て、38名の被験者に対しオフライン調査を行った。被験者は、並立助詞「や」を含むさまざまな例文を読み、そこで用いられる「や」の意味の解釈を行った。調査結果の分析により、被験者は、並立助詞「や」を 'and the like'・'or the like'・'and/or the like'・'the like' の要素の全くない 'and' または 'or' など実にさまざまに解釈していることがわかった。また、

その意味解釈は、文脈に加えて社会的通念やそれぞれの被験者の持つ常識・経験・知識などを根拠に行われること、さらに並立助詞「や」によって列挙された要素のもたらす集合イメージも「や」の意味解釈に影響を与えているということが観察された。

## 発表要旨

### キャサリン・パターソンが描く アメリカのワーキングガールの成長

大喜多 香枝

神戸女学院大学大学院博士後期課程

現代アメリカを代表する児童文学作家、キャサリン・パターソンは、1992年の作品 *Lyddie* において、綿密な歴史的事実の考察をもとに、19世紀の紡績工場で働く女工の様子を描いている。しかし、女性の道徳的品性を重んじ、家庭の中で育み慈しむ能力をもつ理想的な女性への成長を描いた19世紀当時の家庭小説とは異なり、主人公のリディー・ウォーソンは、農場の借金返済のためにバーモント州の田舎からマサチューセッツ州の都市へと出稼ぎにきて、「幸運なる墮落」による無垢の喪失、そこからの救済という、Bildungsromanと伝統的アメリカのアダムのパターンによる経験を通し成長する。

一家を取り仕切っていたリディーは、家庭における彼女の力が、都市の工場において全く機能しないことを知る。都会での暮らしは家族のことを忘れるほどリディーを夢中にさせるが、母親からの手紙により本来の目的を思い出したリディーは、冷酷な金の亡者への変身という墮落を経験する。

しかし、無垢を体現する妹のレイチェルとの暮らしが、リディーの凍った心を溶かし、彼女を墮落の状態から救済する。そして、糸巻き取りの仕事のせいで体調を崩した妹の命を救うため、リディーはレイチェルを自分のもとから去らせることにより、無知や無力を象徴する子供性(無垢)を喪失する。また、工場の監督官による性的嫌がらせから女工仲間を守ったリディーは、道徳的に墮落しているという理由で解雇されるというfall(墮落)を経験する。しかし、リディーは、監督官に自分が墮落などしていないことを文字と言葉を用いて証明し、不名誉な地位から自らを救済する。

農場を買い戻すという目的を果たすことはできないが、一連の経験により自ら人生を切り開く力を手に入れたリディーは、大学への進学を決意し、成長

を遂げるのである。

## 2008年度の新事業

### 英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年度から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、2月に、英米文学、英語学、翻訳・通訳、グローバル・コミュニケーションの各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『英文学科卒業論文プロジェクト論集』2009年度春刊行予定)に掲載する。

### 英米文学

### 英語学

### 翻訳・通訳

### グローバル・コミュニケーション

### 2008年度英文学科主催連続講義

新しい英文学科の可能性を探ることも視野にいれて「日本と英語圏文化の交流」という大きなテーマのもと、各分野のエキスパートをお招きし、連続講義形式の研究会(計6回)を開催した。学部学生、院生、学内外から多くの参加者があった。  
10月28日 大津留(北川)智恵子 関西大学教授  
「アメリカ大統領に移るアイデンティティー 日本の視点から」

- 11月 1日 新倉俊一 明治学院大学名誉教授  
「西脇順三郎とヨーロッパ文学」
- 11月14日 原 成吉 独協大学教授  
「ゲーリー・スナイダーの長篇詩『終わりのなき山河』  
禅、能、山水画、ウィルダネスから見た環太平洋の詩学」
- 11月20日 山岡洋一 翻訳家・青山学院大学非常勤講師  
「幕末明治の翻訳に学ぶ 米国の文献からの翻訳」
- 12月11日 泉川康弘 本学准教授  
「冷戦後のアメリカ外交： クリントン、G.W.ブッシュ、そしてオバマへ」
- 12月18日 高畑昭雄氏 産経新聞編集委員兼論説委員  
秋元千秋氏 NHK解説委員  
「アメリカ次期大統領と今後の日米関係」

## キャンパスニュース

### < 退任 >

Cynthia J.N.Seton教授  
泉川泰博准教授

- \* David George McCullough専任講師は、本年3月末に3年間の任期を終えられ、本年4月からは准教授として就任されます。
- \* Edward K.Chan客員教授は、1年間の任期を終えられ、本年3月にアメリカへ帰国されます。
- \* 出口真紀子氏は、Chan氏後任の専任講師として、本年4月に就任されます。
- \* Margaret C. Kim専任講師は、本年3月末に4年間の任期を終えられます。
- \* Kurtis McDonald氏は、Kim氏後任の専任講師として、本年4月に就任されます。

## 国際学会発表

### \* 別府恵子氏

アメリカ、マサチューセッツ州ピッツフィールドで開催された“History and Edith Wharton Conference”(2008年6月26-28日)にて研究発表。

アメリカ、ロードアイランド州ニューポートで開催された“The Fourth International Conference of Henry James Society”(2008年7月9-13日)にて研究発表。

### \* 東森勲氏

アメリカ、ハワイで開催された Hawaii

International Conference on Education (2009年1月4日)にて研究発表。

オランダ、ライデン大学で開催されたRhetoric in Society(2009年1月2日)にて研究発表。

### \* 泉川泰博氏

北海道大学スラブ研究センターで開催されたInternational Symposium on the Cold War in Northeast Asia(2008年6月)にて発表。

Bostonで開催されたAmerican Political Science Association Annual Conference(2008年8月)にて研究発表。

### \* 栗栖和孝氏

アメリカ、Cornell Universityで開催されたInternational Conference on Korean Linguistics (2008年6月26-28日)にて研究発表。

ロンドン、University of Londonで開催されたEuropean Conference on Korean Linguistics (2008年8月7-9日)にて研究発表。

アメリカ、Cornell Universityで開催されたNorth East Linguistic Society (2008年11月7-9日)にて研究発表。

アメリカ、City University of New Yorkで開催されたJapanese/Korean Linguistics (2008年11月13-15日)にて研究発表。

### \* 小杉世氏

オーストラリア・メルボルン市で開催されたWorld Indigenous Peoples ' Conference on Education(2008年12月7日-12日)にて研究発表。

### \* 田邊希久子氏

中国・上海で開催されたXVIII FIT World Congress (2008年8月4日-7日)にて研究発表。

### \* Yolanda Alfaro Tsuda氏

フィリピン、フィリピン国立大学で開催されたInternational Conference on Philippine Studies (2008年9月22-26日)にて研究発表。

### \* 鶴野ひろ子氏

米国サン・フランシスコで開催されたThe 124<sup>th</sup> Modern Language Association (MLA) Convention (2008年12月27-30日)にて研究発表。

### \* 和氣(直田)節子氏

イギリス、Bridgwater大学で開催されたColeridge Summer Conference (2008年7月23-30日)にて研究発表。

### \* 吉田純子氏

アメリカ合衆国、イリノイ州 Bloomingtonで開催されたChildren's Literature Association 35回国際大会 (2008年6月12日-14日)にて研究発表。

## 大学院生による学会発表

### \*藤原知予氏

神戸女学院大学で開催された日韓美学研究会  
(2008年2月8日-12日)にて研究発表。

松山大学で開催された日本ロレンス協会第39回  
全国大会(2008年6月21日、22日)にて研究発表。

### \*是恒孝子氏

東京理科大学で開催された国際ビジネスコミュ  
ニケーション学会(2008年10月12日)にて研究発表。

### \*吉村愛里氏

大妻女子大学で開催された日本比較文学会創  
立60周年記念第70回全国大会(2008年6月21日)  
にて研究発表。

## 記念賞

2008年度、以下の学生に対して、次の学内の記  
念賞が授与されました。

佐々城きく(女32C36)記念賞 E06043 鍵中 千明

デフォレスト記念賞 E06078 南 悦子

丹部トモ(C41)記念賞 GE0732 美村 佳世

## 会員による出版紹介

馬場美奈子氏 『現代ネイティブ・アメリカン  
小説 描きなおされる「インディアン」』(英  
宝社、2008年1月刊)

Edward K. Chan 氏 “Food and Cassettes:  
Encounters with Indian Filmsong” Global  
Hollywood: Travels of Hindi Song and Dance  
Sangita Gopal and Sujata Moorti. University  
of Minnesota Press, 2008: 264-287.

泉川泰博氏 翻訳書『社会科学の方法論争:  
多様な分析道具と共通の基準』(ヘンリー・ブレ  
イディ、デヴィッド・コリアー編、宮下明聡共  
訳、勁草書房)

風呂本淳子氏 『風の巻く丘』(マリーズ・コ  
ンデ著、共訳、新水社、2008年12月刊)

『英語文学とフォークロア歌、祭り、語り』  
(松本昇共編著、南雲堂フェニックス、2008年  
12月刊)

三宅あつ子氏 『ヘンリー・ミラーを読む』  
(共著、水声社、2007年12月刊)

田邊希久子氏 『英日・日英 プロが教える基礎  
からの翻訳スキル』(共著、三修社、2008年10月刊)

鶴野ひろ子氏 “Emily Dickinson's Encounter  
with the East: Chinese Museum in Boston.” The

Emily Dickinson Journal (The Emily Dickinson  
International Society) 17.1 (2008): 43-67.  
和氣(直田)節子氏 “Coleridge's Transcendental  
Philosophy” (The Coleridge Bulletin, The Journal  
of the Friends of Coleridge, 32, 48-54) (2008年  
冬刊)

吉田純子氏 『新・アメリカ児童・思春期文  
学家族探しの旅』(阿咩社、2009年2月刊)

“Constructing Cultural Memory beyond the  
Limits of Narrative in So Far from the Bamboo  
Grove.” Tinker Bell 54.

## 神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専  
攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら  
研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の  
向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志  
および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員  
とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英文学会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、  
本学英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。
- (5) (a)上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b)運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名  
で構成されるものとする。

### 内規

#### I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の  
簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事  
務室まで申し込み、K C E L S 委員会が審査  
の上、決定する。

#### ・維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会  
当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入  
する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経  
費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、K C E L S 専用の口座を利用  
する。



## 編集後記

会員消息・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈り致します。

---

### *KCELS Newsletter* 編集委員

---

(2008年度運営委員)

栗栖和孝 溝口薫 山田由美子 (ABC順)

### *KCELS Newsletter No.24*

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel(0798)51-8548 Fax(0798)51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/kcels.html>

2009年3月発行